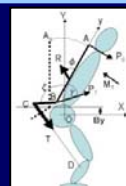
関係者インタビュー

旭ゴム化工株式会社
代表取締役社長　林　雅洋氏
営業部　営業技術担当　吉田　博氏、商品企画室　長坂　彰人氏
2012年12月6日　インタビュー：中部オフィス　大石　誠

「介護する人」もサポートできる社会を目指す　～新しい社会貢献の在り方を創造する～

長坂　彰人氏

当社は主にゴム製の工業用部品を作っています。そして、6年前からはこの技術を活用し、医療用具である腰痛サポーターの研究開発に取り組んできました。医療介護の現場では、看護者や介護者が腰痛になるケースが多く、そういった方たちに使っていただきたいという思いで始めた取り組みでしたが、複雑な動きに対応する製品を作ることは難しく、こう着状態が続いていました。
そして今回、新たな改良品を作り出すことにもう一度トライしてみようと、事業に参加することを決めました。

◆「部品」から「最終商品」へ

今までは、部品は作っても最終商品を作る機会はなかったため、コストの検討から生産のプロセス、商品の上代価格、カタログや取扱説明書など、一連のストーリーを経験したのは今回が初めてでした。また、部品の場合はスペックや納入先は決まっていましたが、今回のような最終商品の場合、これまでとは違うアプローチを自分たちで考えていかねばなりません。
毎週月曜日のミーティングでは、社長を交えた議論をし、自分たちが何を打ち出していきたいかという方向性を定めていきました。その中で、アピール力ある商品はこうして作り上げていくのだな、と手ごたえを感じ、それを実際に仮想カタログとして表現できたことは、非常に意味のあることでした。また、HOSPEX出展という目標は、4か月の間、議論を重ね、ターゲットを設定し、使う人の視点で考え続けるための大きな原動力になったと感じています。

吉田　博氏

◆「想定外のこと」にこそ潜在するヒント

これまで、技術者として車の工業用部品を出展したことはありましたが、医療介護という新しい分野の、しかもエンドユーザー向けの最終商品を出展したのは初めてでした。HOSPEXには全国から多くの来場者、そして様々な課題が集まります。我々はまず、プレゼンテーションの方法を工夫しました。商品の動きを見せることで腰痛サポーターのメリットをアピールし、多くの方に興味を持っていただくことができました。
また、出展にあたってはQ＆Aを用意して臨みました。実際に使う人からの質問は想定外のものも多く、「こういう考え方があるのか」と、生の声に向き合えたことは大変有意義でした。どういう使い方をするのかについて、我々メーカーは現場の外からしか想定することができないという限界があります。そのため、今後は最終ユーザーへのアプローチに力を入れる必要があると感じました。

◆たゆまぬトライ＆エラーから新たな社会を創る

我々は、これまでも主体性ある機能商品の創造を目指してきました。現在の本業は工業製品の下請け業となっていますが、自分たちで設計・製作することで、脱下請けをはかりたいと思っています。そのために長年トライ＆エラーを繰り返しながら、ここまできました。
確実に、高齢化社会は到来してきています。今後、医療介護分野で働く人はますます増えていくことでしょう。その中で、今回の腰痛サポーターは、重要な商品となるはずです。当社はこれからも、新たなマーケットを積極的に開拓し、社会の課題である高齢化社会への即応を目指していきます。

林　雅洋氏

■ 本事業に関するご紹介はこちらから　＞＞ http://www.jmac.co.jp/special/health_care/

【お問合せ】株式会社日本能率協会コンサルティング
TEL.03-3434-0982　mail :healthcare_jmac@jmac.co.jp
URL:http://www.jmac.co.jp